

NewsLetter



自治医科大学地域医療オープン・ラボ

Vol.103,Mar,2016

地域医療の現場から初めての症例報告～CRST のすすめ

☆推薦文☆ 國友耕太郎先生から『巨大子宮筋腫摘出により高アンモニア血症の改善がみられた症例』について、CRSTに英語論文にできないかという依頼があり、一読後これはモノになるなど直感しました。消化器内科、産婦人科両科の専門的な知識が必要であり、私とさいたま医療センター消化器内科の松本吏弘先生がサポートし、英語論文の作成が始まりました。正直に打ち明けると、投稿時点では、なぜこの症例において巨大子宮筋腫を摘出したことで高アンモニア血症が急速に改善されるに至ったのか、著者全員、まだ誰も気付いていませんでした。ところが、この症例報告を査読したreviewerから、”A patient had suffered from severe constipation for 7 days before admission. I think this constipation directly caused encephalopathy.”というコメントがあり、考察や仮説が全面改訂になった、という「落ち」がありました。まさか、強度の便秘が原因で肝性脳症が起こるとは、夢にも思わなかったのですが、このreviewerはそういうことがあると知っていたわけです。

CRSTは、症例報告の英語論文作成を全面的にバックアップしています。サポートしてくれる先生139名(2016年2月現在)は、皆、英語論文作成の達人域に達した人ばかりです。英語論文を書くことは、依頼者のみならずサポートする我々にとっても非常に勉強になることが多く、このシステムはWin-Winの関係にあります。これは、と思えるケースに巡り合ったときは、ぜひ、CRSTに一報いただけると幸いです。

産科婦人科学 大口昭英 (CRST 副代表)

熊本県天草市立河浦病院 内科 國友耕太郎(熊本県34期卒業)

私が熊本県上天草市にある上天草総合病院で勤務していた時に経験した、巨大子宮筋腫摘出により高アンモニア血症が改善した症例が、自治医科大学CRST (Clinical Research Support TEAM in JMU)の先生方にご指導いただき、Journal of Obstetrics and Gynaecology (JOGR)に掲載されることになりましたので、ご報告させていただきます。症例は53歳女性、自己免疫性肝炎(肝硬変に進展していた)で肝性脳症を発症し救急搬送された患者さんです。アンモニア値がなかなか低下せず、巨大子宮筋腫(MRIで16×12cm)が何らかの影響を及ぼしているのではないかと考え、子宮筋腫を摘出したところアンモニア値が低下してきたという症例です。



私は平成23年3月に自治医科大学を卒業し、2年間の初期研修を終え、卒後3年目から地域医療に携わるようになりました。卒後4年目までは何とか毎日の診療を乗り越えるだけの日々で、論文を提出したり学会で発表したりすることに対して目を向けることがありませんでした。というより、何をどうすれば良いのか全く分からない状態でした。

症例報告を試みようと思ったきっかけは、九州の自治医大卒業生で毎年開催されている九州地域医学研究会(平成27年2月)に参加したことでした。そもそも、この九州地域医学研究会に参加したのも、卒業してから初めてのことでした。その時に自治医科大学 地域医療オープン・ラボ 地域医療学センター地域医療支援部門の亀崎豊実先生がCRSTについて講演をしてくださり、自治医科大学内科学講座血液学の神田善伸先生が統計ソフトの講演をしてくださりました。その講演で初めてCRSTの存在を知り、「何か研究とかできたら面白そうだな」と思いました。その夜の懇親会で、同期で親友の小野原先生(佐賀県34期卒業)と、先輩である佐藤新平先生(大分県30期卒業)とお話をしていたときに、二人ともCRSTを活用しているという事を聞きました。そして佐藤先生から「地域医療をしながらでも何か発信できる。まずは何でも良いから自分なりに症例をまとめてみて、CRSTに相談してみれば良い。そうすれば、親身になってくれる。とりあえずCRSTに

提出してみろ。」というアドバイスをいただきました。

症例をまとめる経験がほとんどなかった私ですが、文献を調べたり、自分なりに仮説をたてて結論を導き、日本語でまとめた症例をCRSTに提出しました。振り返ってみると、かなり幼稚な内容です。

その後、CRST事務局から英語論文として提出できそうな症例であるという御返事をいただきました。そして、自治医科大学産婦人科 大口昭英先生と、さいたま医療センター消化器科 松本吏弘先生に直接メールでご指導いただきました。私が考えている仮説をどうすれば証明できるか、また、他の仮説をたててそれを証明することができるかどうかなど、両科からの専門的な御意見を伺いながら、徐々に症例報告としての形ができあがっていきました。論文とはこのように作成していくものだというのを初めて経験し、大変な事もありましたが、とても刺激的で楽しかったです。

私はCRSTの存在を卒業後4年間知りませんでした。しかしCRSTの存在を知った時、「地域医療に携わっていて、これを利用しない手はない」という思いと「自治医大卒業で良かった」という思いがありました。CRSTは「自治医大卒業生や地域医療従事者の研究活動を支援するお節介集団」とホームページに書かれている通り、我々の症例報告や研究論文をアクセプトに導くために、各科専門の先生方がボランティアでアドバイスを行なってくださいます。地域によっては上級医の先生がいらっしゃらず、研究や発表を行いたくてもやり方が分からない先生もいらっしゃると思います。事実、私はそうでした。「論文ってどう書けば良いのか」、「書いたとして、どんな雑誌に投稿すれば良いのか」、「英語で書いたとしてもどのようにコンタクトをとれば良いのか」など、分からないことだらけでした。しかし、CRSTに相談したところ、各専門の先生方から様々なアドバイスをもらいながら、田舎にいながら論文を書くことができました。

各都道府県で地域医療を支えていらっしゃる先生方の中で、私のような境遇の方がいらっしゃれば、是非CRSTを活用していただきたいと思い、筆を執らせていただいた次第です。

最後になりましたが、症例報告を作成するに当たり、直接ご指導していただいた大口先生、松本先生には大変お世話になりました。お忙しい先生方の貴重なお時間を私の論文指導にあてていただき、本当にありがとうございました。

今回の経験を活かして、現在、次の論文作成を行なっています。そして、論文作成ができたことで普段の臨床がより充実するようになりました。この経験を大事にして、さらにステップアップしていきます。



！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先:地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行]自治医科大学大学院医学研究科
地域医療オープン・ラボ運営委員会
事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7044/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>